明治十九年八月第一印行

新體詩學必携

新體詩格 殿國美談 合卷

新体詩學研究會藏版

東京春陽堂發兌

東京春陽堂

はしがき

春のあさたの梅櫻　錦織おす西東
夏のもふへゝ螢火の　草葉を照らす玉の露
置ふし野邊ゝ萩桔梗　紅葉ふみ分け啼鹿の
更けゆく月ゟ風寒み　何時ぞか峯ゝ木枯の
吹あらしたる玉霰　驚き覺めし夢のあと
綴るからうた倭歌　韻字平仄てゟをたの
いと六ケしき格式ゟ　筆の命毛よたり果
かくもはのおき腰折ゟ　詩ゝ志ゟあらで寢言へ
見よ吾友よ諸人よ　落花居士てふ其人ゝ
昔の樣ゟ引替えて　編み集めたる今摸樣
新体詩てふ名ふよりて　彼の「ミルトン」や「ホーメル」ゝ

言葉の花を日の本ま　移し哉えんと七五おる
句調のもとを培むむ　ためまものせし此冊子
櫻ま載せてうゐらする　門出を祝ふ端書ふ
根おし言のみ並へ立て　赤耻茲ま書き畢
明治十九年春季皇靈祭の前五日梅花のふかき
ところふおゐて

香湖散釣誌

もしのき

藁葺屋根のされこめて　田舍住居のまひしさい
物語らんも友い来す　徒然草の鬱散し
五合徳利を轉伏ち　くたらぬ管を捲舌の
廻らぬ筆のまま〳〵に　出来上りたる小冊子
醒めての後ま見てあれた　いとお可笑しくいありつまと
出版せぬうどうだおと　會員諸子ふ勸められ
ウント承知いせちものゝ　見所も別に内實た
拙者學問淺くして　見識とゝえなき上ま
參考書とて更まおく　忘ま殘りちひろむ書
片輪おものい勿論て　利益い人ま與へ祢と
世ま害なといなのらんと　おこうまーくも屁理窟と

胸てこしつけよき本ハ
思ひしまゝ一通り

世のものゝ為り譲らんと
見る人々ゝお斷り

落花生識

新體詩學必携

中川落花居士 演

詩ハ唐詩と稱へつゝ
左ハ左り乍ら一様ゝ
詩ハ志なりてふ言の葉ハ
奈何ゝる胸の考へゝ
妙ゝ理窟を附會ゝて
手本とゝるハ唐詩ぞと
遷り行く世の有様を
人の食散(コ)せし其糟粕(カス)を
我ハ詩人ぞ雅客ぞと

皇國(ミクニ)の歌と區別せり
志(こゝろ)を言ふゝ外ゝらで
今も昔ゝも變らぬゝ
詩を學ぶもの兎や角と
唐詩の外ゝ手本なし
言葉の變り文章の
他外ゝ見爲ゝて往昔(イニシヘ)の
集て常めて意氣自得
誇るゝこそ淺間ゝく

又歎くべき事ぞかし
時代と場所とは千早振る
英吉利國や佛蘭西の
用とされぬ譯されど
英語佛語を學ぶもの
螢雪多年たりとても
憾あることとは吾々の
二つを無ぬるものとおや

蓋し言語と文章と
神代の言と今の世と
文は直ちに我くふの
古記書物を讀まんもの
先づ夫〳〵の師を求め
猶未だ靴を隔つるか
常に知り得る事おるま

正學指掌ニ曰ク五七言律絶ハ唐ノ制体タルヿ
誰レモ知リタルヿナリ初盛中晩ノ別アレ𪜈強
テ論シ辨スルニ及ハス全唐ノ詩ヲ濕シテ讀ム
ヘシ(中略)宋ハ皆蹈襲ヲ嫌ヒテ務メテ新意ヲ出

セリ元ハ寢ク富麗ヲ務ム是レ明詩ノ漸ナリ明
詩ハ嘉隆以前ハ自然ニ近シ空目一流ハ別ナレ
𪜈嘉隆以後ノ如キニハ非ス滄溟弇州カ徒ハ摸
擬ニ傷ケラレ公安竟陵カ徒ハ奇僻ニ傷ツケラ
ル皆故意ニ出セル家風ニテ自然ノ氣象ニ乏シ
(中略)清詩ハ大抵公安竟陵カ餘波ニテ又纖弱ナ
ル多シ

前ふ演さる此文は
評をおおさるものおれど
大同小異の事ふして
自然ゑ出づるものならん
議論好みい時ゑつれ

水竹尾藤先生の
其他學士の評とても
考へ見れた是の違
見よや見よ〳〵人々の
昨日迄是と謂いれおも

今日は非となる世の習
謂へども思想別々ゐ
一人の人の一日ゐ
拉げて一ツにおさんとい
故ゐ彼の徒の詩と見るま
さも殊勝氣まかき散志
當を得ぬとう六ケ敷
あだゐ心を筑紫がさ
其罪深く支那學の
思想を制し尚古おん
活潑有爲の心をば
左樣して見ぎば詩たりとて

殊ゐ同時の人さりと
甚しきま至りてい
時と場所とま異るを
詩い志を演るものおらず
心まもおき事柄を
志かのみならず故事平仄
真(マコト)の味を不知火の
流れ来りし此弊い
固陋の教學ぶ徒の
唯精神を勝たしめて
失い志めし譚ならめ
時に隨ひ世まつれて

遷り變りて其時の
誰まも解る其上に
英國人(エキリス)の「ミルトン」や
詩ま巧ぞと人云ふも
最と面白く綴るのみ
其心地志て常不斷
志を寫し詩ま出せば
丸で變りて甦生り
詩も亦世にぞ涛むぎん
去い去り乍ら若しや又
足らざる上ゐ不充分
云ふ事なぎば餘儀おきも

言葉を以て綴るこそ
自然巧ゐ至るらん
日耳曼國の「シュルレル」の
唯言の葉の用ゐ方
去ぎば皇國の人々も
用ゆる言葉其れおりて
陳腐漢の寢言とい
今まで死した我國の

皇國の言の葉の數い
思想を演ぶる能いぞと
左いおきのみか吾々も

却て今の俗曲の
含める事を知るものと
日ふ進み行く文明の
不便の漢字廢さんと
平仄韻字に苦をみて
折りても之と羅馬字の
消へて跡かき泡雪の
胸の疑ゐ此處ゑ來て
勉めよ勵め我詩をば

今我々の唱ふなる
人ゑ知らるゐ四五年の
言葉の中ふ真の味
殊ふ旭の勢いゑ
羅馬字會や假名の會
人心向ふ今日ゐ
草卧まふけ無駄骨を
萬葉假名ふ改めむ
應ゑ晴べー聞く人の
止むべきものゐ漢詩なり
學むんものゐ是を聞き

新体詩てふ名を冠り
前ゑ當りて大學の

教授の任を帶びらるゝ
文學々士の井上氏
ものせる本の出をより
學むんもの丶增せしこと
祝ひ喜ぶ事ぞうし
抜刀隊の歌と云ふ
軍歌となりし事共ゐ
又是の道の面目ぞ

外山矢田部の兩大人と
合著の新体詩抄なん
日未だ淺くありながら
皇國の爲ゑ是の上ふき
殊ふ外山の先生の
其詩ゐ早く我國の
同氏の名譽のみならぞ

抜刀隊

我ゐ官軍我敵ゐ　天地容ざる朝敵ぞ
丶山仙士

敵の大將たるものは
之ふ從ふ兵(ツハモノ)は
鬼神に恥ぬ勇あるも
起しゝ者は昔より
敵の亡ぶる夫までは
玉ちる劔抜き連れて

皇國(ミクニ)の風と武士(モノノフ)の
維新このかた廢れたる
又世ゝ出づる身の譽
刃の下ゝ死ぬべきぞ
死ぬべき時は今なるぞ

古今無双の英雄で
共ふ慓悍決死の士
天の許さぬ叛逆を
榮えし例(タメシ)あらざるぞ
進めや進め諸共に
死ぬる覺悟で進むべし

其身と護る靈(タマシヒ)の
日本刀の今更ふ
敵も身方も諸共ゝ
大和魂ある者の
人ふ後れて恥かくな

敵の亡ぶる夫までは
玉ちる劔抜き連れて
前と望めば劔なり
劔の山に登らんは
此世ゝ於てまのあたり
我身のなせる罪業(ザイガウ)は
賊を征伐するが爲め
敵の亡ぶる夫までは
玉ちる劔抜き連れて

進めや進め諸共ゝ
死ぬる覺悟で進むべし
右も左りも皆劔
未來の事と聞つるゝ
劔の山ふ登るのも
滅ぶを爲ゝ厭らずして
劔の山もふんのその
進めや進め諸共に
死ぬる覺悟で進むべし

劔の光ひらめくえ
四方ゝ打出す砲声は

雲間ゝ見ゆる稲妻か
天ゝ轟く雷ゝ

敵の刃ゐ伏ゐ者や　丸ゐ砕けて玉の緒の
絶えて墓なく失(ウ)せる身の　屍(カバネ)ゐ積みて山をなし
其血ゐ流きて川ゑ成す　死地ゑ入るのも君が爲
敵の亡ぶる夫までゐ　進めや進め諸共ゐ
玉ちる劒抜き連れて　死ぬる覺悟で進むべし

彈丸雨飛の間ゑも　二ツなき身を惜まぞゑ
進む我身ゐ野嵐ゑ　吹られて消ゆる白露の
墓なき最後を遂るとも　忠義の爲ゑ死ぬる身の
死ゑて甲斐あるものならば　死ぬるも更ゐ怨なし
我と思ゐん人たちゐ　一歩も後へ引くなかれ
敵の亡ぶる夫までゐ　進めや進め諸共ゐ

玉ちる劒抜き連れて　死ぬる覺悟で進むべし

我今茲ゐ死なん身ゐ　君の爲なり國の爲
捨つべきものゐ命なり　假令屍ゐ朽ちぬとも
忠義の爲ゐ捨る身の　名ゐ芳しく後の世ゑ
永く傳へて殘るらん　武士と生れた甲斐もなく
義もなき犬と云ゐるゝゐ　卑怯者(モノ)となそしられぞ
敵の亡ぶる夫までゐ　進めや進め諸共ゑ
玉ちる劒抜き連れて　死ぬる覺悟で進むべし

偖て名を冒したることも　前ゐ話せし如くゐて
其源をたづぬれば　皇國の古き長歌とて

其体裁い異りおー　殊に小説院本ゐ
七五の体いいと多し　例と引くまい及ばねど
二ツ三ツ四ツ顯して　聞く人々の注意まで
話をも害や無るらん

生寫朝顔日記

譬も凄き小瀬川の　入江の柳春待て
眉作れと彌寒き　風の手櫛に梳きのへし
白粉ならでおく霜の　色も晃く汀の岩の
打寄浪も氷いて　氷柱ゐ下る計おり

平仮名源平盛衰記

甲の星を戴きて　夜晝分ぬ旅かれど
勇む驛路の鈴鹿山　去年の余波と消殘る
雪の戸鎖の麓の關　八十瀬に續く加太山

いろは文庫

附たる以路波の倭仮名　大和魂大丈夫の
思ひ極めー四十七　以路波の數の合印
夜討の摸様を顯して　自らなる定とい
後まで思ひ合せける

其外茲處や彼處まい　常に見出を所おり
蓋ー七五の綴り方　障りをおさで口調よく

言顯いさるものなれむ
詩と名づけらる其もの、
斯て我詩い規則とて
花の朝や月の夕
去りとい云へど熟々と
考へ見れば西洋の
左樣して見れば我々い
「ポエトリー」とい如何樣か
然るま是處ゐ難事ゐり
萬づ異ゐる事ゐれば
寫し出せば中々ま
もゐの如きい「グリーキ」や

自づと今の新体の
基を暗ま開きしゐ
作者を縛るものもなし
志の儘に讀み玉へ
我詩の体の創造を
「ポエトリー」より出しなん
詩を學ぶべき其爲ま
究むるとも益ゐらん
國異ゐれば自ゐら
直ちに彼を其儘に
繁雜のみか英吉利の
「ラテン」の國の綴り方

定まる性(テーメナイト。カンヂイー)のあるえのと
關り作るものゐきば
變りあるを承知して
ゐるべきものを拔き出し

「ポエトリー」とい詩學まて
物言ひ樣の一樣に
一種の風ま言ひ出を
違ひを是に生ぞらん
第一　言葉の甚しき轉置
第二　言葉の省き
第三　特別の言葉訛り等の用

異りおりて音勢(アクセント)に
文字の數や色々の
我詩の爲ま參考と
話さん事ぞ勝るらん

胸ま浮べる想像を
定まる順と異まして
自づゐらゐる文章と

其他お話しすべき事　あきど直ゝい用立ず
先づ是れ等をば心得て　大抵足ると思ふなり
又詩學をば別け見れば　見る人ゝより樣々に
記事、詩、戲曲丹琴歌と　先づ大別におきあれど
重おるものも七あり　又其中ゝ種々小別
一とつ一とつゝ語らんも　いと煩はし事おきば
唯一通り次にあげ　先づ一服喫烟を

記事詩（エピック）

詩學中高尚ニ且ツ嚴正ナルモノニシテ「エピツク」ナル字ハ希臘ノ「勇者ノ詩」ナル文字ヨリ出テシモノニシテ英雄豪傑ノ功蹟ヲ吉トシ

其名譽及ヒ種々關係ノ事情ヲ叙ス然レ𪜈意匠ノ一致ヲ保タサル可ラス則チ左程要用ニモアラヌ談話或ハ詩註等ヲ挿入ス可カラサル抽出ノ一ノ重大ナル行爲ヲ以テ全篇ヲ通スヘシ是ノ詩ノ同時ニアリテ困難ナルハ蓋シ其適度ノ點ヲ定ムルニアラン故ニ作者最モ少ナク其成功ヲ得ルモノニ至リテハ愈稀ナリ

戲曲（ドラマチック）

戲曲ハ大ニ記事詩ニ類セリ一般ニ要用ナル出來事ヲ叙シ大抵無韻ヲ用フ而シテ其叙事ヤ作者之ニ關セスシテ殆ト聽ク者ヲシテ作

者自身タルヿヲ疑ハシムル如キヲ要ス最モ注意スヘキヿ三アリ

第一　行爲ノ一致　唯事情ノ要点ノミヲ以テシ伏線ノ如キモノヽ外間事ヲ挿入ス可ラス

第二　所ノ一致　連續ノ地方ニ行爲ヲ限ルヘシ

第三　時ノ一致　單一ノ時日ヲ以テシ其行爲ヲ限ルヘシ

更ニ附ス可キヿアリ詩法（ポエチカレ）是（シアスチス）レナリ則チ段落毎ニ善行惡事ノ應報ヲ示スヘキナリ之ヲ要スルニ其順序五段トナスカ如シ第一ニ其仕

組ヲ示シ第二ニ之ヲ擴張シ第三ニ至リ附事ヲ以テ組合物ヲナシ第四ハ又其混雜ヲ解ク方案ヲ設ケ以テ第五ノ結局ニ至ルノ道ヲ開クヘシ

又種類ニ樣アリ一ヲ「ツラジデー」トシ他ヲ「コメデー」ト云フ「ツラジデー」ハ其組織大業或ハ威蹟ヲ叙シ其間ニ不幸ナル災難等ヲ加ヒ讀者或ハ見ル人ヲメ中心ニ悲哀驚愕ノ情ヲ起サシム「コメデー」ハ之ニ反シ平常ノ語ヲ用ヒ要スルニ面白カラサルニ非サレヒ屢々野鄙ナル笑談ニ陷ルヲ免レズ「フアース」「バレスク」「メロドラマ」「バルシツク」「プロログユ」「エ

ピログユ」等皆戯曲ノ一部分ナリ

近古ノ作者中英國ノ「シセーキスピーア」ハ第一流ニシテ佛國ニアリテハ「モリール」「ラミン」獨國ノ「シユルレル」等ハ最モ著名ナリ

琴歌（ライリック）

琴或ハ他ノ樂器ノ唱歌トナルヘキモノナリ是ノ中「ヲード」ト稱スルモノアリ最モ高尚ナルモノニシテ今日學校ノ唱歌ノ譜是レナラン往昔ニアリテハ頌歌（ヒム）ト呼ハレ猶現時教會ニ於テ用フル所ノ歌ナリ

悲歌（エレジアック）

宇ノ如クシテ文學中秀タル詩ナリ其死ヲ追

想シ在世ノ友人ノ悲歎ヲ録スル短篇ヲ碑銘（エピタフ）ト云フ「グレー」氏ノ墓上感懷ノ詩（矢田部良吉先生譯メ世ニ行ハル）ハ最著名ナリ

牧者詩（ペストラル）

牧者ノ生計ノ摸様ヲ叙スモノナリ詩人大抵村落住居ノ實ニ喜シキヿヲ以テセリ

教法詩（ナダクチック）

快樂ヲ感セシメンヨリ寧ロ人ニ教ヘンヿヲ旨トス去レハ詞藻ノ華美ナルヲ最モ要ス

落首（サチリカル）

人ノ薄弱愚痴及ヒ惡行等ヲ謹嚴ヲ以テ批評シ或ハ嘲笑スルモノナリ

區別い夫で解るらん
有韻無韻のある事と
偖て有韻の詩の中ゴ
三句一韻なるもあり
何句ト云へる定りかを
二句ゥ夫より余計ふる
規則正をきものふして
詩人が好みまふ〳〵ゴ
多分普通い四句からん
第二第四の句の韻を
三と四句目を同韻ゴ

第一例

左様をたとこで詩の中ゴ
先づ一通り語るべし
二句一韻のものの何きば
其句の數い別段ゴ
茲ゴ「スタンザ」なるものい
句の數からで組立て
其長短や方法い
許さる様なものかれど
第一番目三番目
同じ母をるが一と二ゴ
なをものからん例拭左ゴ

柏手打て須歌擧げ　共ゴ拜めよ皆の民
汝等守り道授け　世界の上の一の君

第二例

清き薫りを東風え　蒔き散さんとふる木末
春告鳥の唱ふ様　心も清き法華經

之と一入廣むれば　八句十二句夫れ〳〵に
次第ゴ多くなるものゥ　又六句ある詩法あり
第一番目三番目　第二第四を同韻ゴ
殘りい夫れで同韻の　例の爲ゴぞ左ゴ一詩

例

友い世と去り朋い去り　何所の誰と親まん
心細さよ唯獨ゴ　生き殘ゴたる身の行かん

夢の旅路の渡場た　淵瀬定めぬ飛鳥川

又小曲（ソンネット）と謂ふものハ　元と伊太利の國よりし

英詩ニこそハ入れらきて　又一種なる詩となれり

其作法ハ前に比し　大ふ難きものニして

韻字の數の多き外　組立様も明白（さっぱり）と

十有四句ニ成立てる　始めの八句二韻ニて

第一番句四五八と　第二番句ハ三六と

七句を以て同韻ふ　後の六句も亦二韻

第一番句三五句と　第二番句ハ四六句と

同韻なりとする如き　去れど「ハラム」の説抔を

間へて益ゝ難きこと　感ぜしむるもの我國ハ

未ざ幼稚なる「ポエトリー」　陶汰（セレクション）の後ニ至りなき

よき方法も出るらん

左ハ拙譯試掲るらん

例

鳴呼ケましくも亦例ハ

植を貸して夏の時　小鳥の歌を聞きなれ去

木も夢覺る山おろし　慈恵（ナサン）も知らぬ枝をこき

葉ハ散り乍ら仰を向き　嬉んと去てか屈む腰

頼り少なく何ちこちし　見る人々も増さん憂（ウキ）

去ハ去り乍ら日の光　いと鮮ゝふ燈る枯木

又や高くも夜ふ至り　閃めく冠り星や月

眩去きまでニ眼こや射り　秋天こそハ美去き

大抵用ゆるものふ去て

無韻（ブランクバアス）の詩とハ記事体の

「百樂園（パラダイス）」の作者なる

「ミルトン」翁が第一ぞ

思ひ回せば英國の
女王の代ぞ目出度けき
詩人で無たる政事家ま
英吉利國の文學ろ
「セーキスピーア」の世ま出て
其玉吟や名作を
子孫に存ー眠り行く
千古不朽の其美名
音色ハ遠く我國の
「アー」學ぶ可し學ぶ可し
「セイーキスピーア」「ミルトン」も
外に謂ふべきものあれど

文學高く「エリサベス」
「マコレー」氏が評ちけん
哲學者とも呼ばれつゝ
名譽を擧げし「ミルトン」や
我文學を改良し
擧ぐれば多く數知れず
世ハ變れども變らぬハ
響き渡るや音曲の
吾々までも知りまける
學びて何とて出来ざらん
同ち人にてあらざるか
濱の真砂の數多く

一々之を拾ハんも
暫らく是處ま止まりて

借て韻脚（ライム）の其法ち
文と君とハ漢詩まて
始ハ種々ま其終り
今我國の我詩人
仮令ば例を左りにそ

死もる思ハ眠るふり
斯の如くまなしおれど
あるが如くま正韻と
習慣法の定めたる

拙き筆の回り無ね
韻脚法ま移るべし

東西別ま異りかく
同韻なりとをる如く
似たる響を用ゆとよ
同字と以て結びつゝ

眠る心ハおろかり
漢詩の法ま通韻の
又許すべき韻字かど
規則がありと聞ちぞよ

前に示せし句尾にある
少きも批難かけれども
仮令へて見れば其上に
均しく「コー」と響くらん
同韻なるか如何よぞよ
凡て詩歌かる其性も
耳聞き分るものなれば
同韻さるを妨げぞ
是に至りて見る時に
仮令へ韻字のあるとても
又其上よ音で讀み
我國人の吟じ方

「リ」の字と「リ」の字同韻に
「ヲ」の字「ウ」の字響き様
「カ」の字を共に冠りなば
左様きたとこで是れに是
目に見るものにあらぞきて
綴に仮令異なきど
少きく余事に渡れども
我國人に支那の詩に
文字を轉倒なきて讀み
或に訓みて讀かどし
韻字に更に無き如し

益々無法と知ぬべし
若し又「ト」字濁り打ち
字を見ると之を判きかば
併きに何れも夫れ〳〵の
然らば同韻からざるの
羅馬字以て綴りかば

ト＝to

知らるゝ如く幾分の
是き我國の通韻と
「ア」列に通し「イ」の列も
考へかきよあらねども
韻脚法に羅馬字で

「ト」の字と同韻かるとう
同韻なりと思ふらん
自然ふ出づる響なれ
否とよ我の思ひふた

ト＝to

似よれる響持ちかれば
なきて我慢もせられんと
互に通し作らんと
用否た人に任をのみ
綴きば能くや分るらん

森と鳥との字の如き　先づ最良の韻字のや
森 = mori　　鳥 = tori
共ゝ四字より組立れ　三字ハ同ジ文字なり
今試ゝ前ゝ挙ぐ　一詩を茲ゝ譯すべし

Kiyoki kaori wo, tofu e
Maki chira san to furu kozue;
Hartsuge-dori no utau yo,
Kokoro mo suman "Hokekyo."

斯の如くゝ山鳥の　尾の長々と説き来り
韻字の事や其外も　先づ一通り知るなん
依りて何分有志者た　善く夫々丹注意して
不便のところや其外と　十分改良おし賜へて

我皇國の「ポエトリー」　煙く事を勉めてよ

新体詩歌必携終

新体詩格

愛國美談序

佳肴ありといふとも箸を着けねば味知るを
國治まりて良き武士の忠も武勇も隠るゝ
譬へば星の晝見へぬ夜ゝ亂れて顯ゝるゝ
其亂世ゆあたりつゝ自國のためゆ骨肉を
挫き折るとも厭ゝぬゆ心つくせし人々の
爲せし功を香湖子が ものせられたる其美談
口調ゆのせて讀む人の心勵まを七五躰
皇國の爲に文學の改良せんと愛國の
世ゆ著名なる人をかり思の丈を伏玄柴の
燃る計りゆ書ゆける心の程ぞ目出度けれ

せんとて僕ゆ示されて
此程こを公行ゆ
仰せよりて一口に
中の真味を味へと
分からぬことを
其饗應の御禮まで

新緑芽屋を鎖を處に

落浴花逸士

書ゆけり

新体詩格

愛國美談の序

往昔「リコルゴス」氏「スパルタ」國の法を立るや貴紳貧士共ゐ一堂ゐ食す其精神を推せゞ則ち曰く是れ富人放肆ゐ流れぞ貧者粗薄ゐ苦しまざるを欲してゐりと然り而して登時幼童の食ゐ侍をるや自ら盜ミ来るゐあらざれゞ敢て食せしめぞ其法理を叩けゞ則ち曰く國ゐ訌患あるや守り男子ゐ在り幼ゐして能く盜を壯ゐして何ぞ懦からむと噫古今既ゐ其時を異ゐし東西全く其洋を異ゐす斯の如き野蠻の風斯の如き不正の理決して我君子國ゐ輸入を可らぞと雖も干戈事を決するの日守り男子に在り豈優柔文弱に流れをめて可ならんや世の學童を視るゐ多くゐ其顔蒼白を帶び其氣象殆ど婦女子の如し是れ予が憂ひて措く能ゐざる所なり夫と愛國の心有るものゐ尚武以て剛ゐ失せぞ尚文以て柔ゐ流れぞ且ツ愛國の心ありて未だ

其君を後にするものあるを聞かざる也未だ其親を遺るものあるを見ざる也蓋し愛國ゐ百行の本なり苟くも其本を培養せぞんゞ其結果亦觀るゐ足らざるや知るべし故ゐ茲に愛國の小言と述べ以て讀者の勇氣を鼓舞せんとを然ゐども口ゐ活潑の所爲を唱ひ身ゐ活潑の所爲なきゐ所謂彼の中風症の人ゐ同じ口ゐ片言の理論おく身ゐ勇壯悲憤の動作あるものゐ所謂彼の瘋癲病者に等し兩者予の與せざる所なり讀者幸ゐ暴ゐ流れぞ鄙ゐ屈せぞんゞ著者の大慶何ぞ加えん焉

明治十九年神武祭の日起稿

香湖散士識

發端

萬の物の靈ありと　自誇る人類の　生れし元ハ分らざる
鷄卵の形久方の　澄めるハ登る天ツ空　濁るハ下る地球上
現ゐ住をる其數ハ　十四億とぞ知られける　却説此人の体格や
肌の色ハ異同ある　其原因ハ食物や　氣候の如何生活の
其方法の異なきる　種々の事より出ぬらん　先ツ大別ハ五ツゐて
其第一ハ「コーケシアン」　美なる容貌美ある體　具えしのみゝ其人が
誇りて說ける樣きけば　彼等ハ五の人種中　世ゐハ最要最益ゐ
文明開化の高点を　占むるハ獨此種のみ　北亞米利加の合衆國

茲ハ住居し歐羅巴　全土ハ住ふ元来の　白色人種の其數ハ
六億万と計えたり　却説第二ある「モンゴリアン」　黄色人種ハ吾々を
こめて其數六億と　五千万ある其人の　性質を評をる西洋の
學者の說ゐ此人種　忍耐強く勉強し　善き性質ハ有乍ら
其精神ゐ限りあり　進歩ハ疎き人ありと　豚尾の支那の奴原の
尾と玉を混淆ゐ　大和錦の紅の　心を持てる日本人
一ツハ赤たる碧眼の　腐りし儘ゐ見當も　斯ハ違ひしことおらん
第三番目ハ「アフリカン」　石炭樣の黑人種　其數凡て一億と
五千万ある其人ハ　腕力強く文學ハ　怠惰ある儘文明と
自ら誇る白人の　彼の奴原ゐ無殘にも　奴隷とおして交易の
品ハされつゝ本國の　亞弗利加州と跡ゐ見て　海路えるけき大西洋
西ゐ離れし亞米利加の　遠き陸地ハ永の年　牛馬の代理果敢おくも

不運の人種ぞ痛し紀　相も變らぞ第四なる　「メレー」人種は煤色の
織おき兒ゐ進歩さえ　捗々ちくも見えぬ也　總數二千と六百万
勇氣鋭く復讐の　性質自然と海賊の　惡し紀業ゐを人多し
此種の人ハ「マラツカ」の　南の諸島ヨ住居せり　北と南の亞米利加の
土人ハ第五の「アメリカン」　赤色帶し身の長ハ　高き勇氣ヨ復讐の
性質稟けし人の數　十四億より四人種を　合計て減きさる殘りハ
此等ハ共ヨ文學の　助ゐ紀儘白人の　進歩と共ヨ逆比例
人員次第ゐ消滅し　無勢力とぞなりヨける　普天の下ヨ住む人の
賢愚智不肖樣々の　變りハあるも其元ハ　「ノア」の三子の一人なる
「セム」ハ亞細亞の西方ヨ　「ハム」ハ亞弗利加ジャヘットハ亞細亞の北西歐羅巴
皆それ〳〵の先祖とハ　泰西人の說く所　果して其と悟りゐば
全能全智の天帝ガ　惡を懲せし洪水も　方舟の中ヨ悠々と

眠りし「ノア」ガ善心の　遺傳ヨ漏ぬ十四億　次第不同の有べきう

○洪水の歌

中川清次郎君譯

1.
惡人共ハ殺されん　地球も共ヨ滅すべし
西も東も人住まん　陸地目掛けて迫ヨ来し
其洪水ハ畏しき　神の怒の是ヨ軍旗」
惡人共ハ逃ヨん場　見出し無ぬるうた便
涙乍らヨ振向けば　浪ハ踵ゐ漂へり
走ヨば又も凄しく　浪捲く海ガ追て行く」
谷ハ死をべき墓場也　心細くも小山へぞ
惡人共ハ先ヨおり　椰子ヨ登るハ幾許ぞ
木ハ曲りツヽ吹き頻る　嵐ハ森を痛く振る」

2.

3.

4.
呻き叫べる其上ゟ
去れど水勢も平らゐ
死したる人の知れぬ數
捲來る浪の凄じゃ
更行く夜の中頃や

5.
見よや見よ〳〵夜も明て
最と不平げゐ捲る渦」
神の方舟い事無ふて
空翔ぶ鳥の其樣ゐ
弓を張りたる紅霓ゐ
浪間ゐ浮ぶ其上に
是い知る安き目標とい

進めよ進め同胞よ
旭輝く日本い
寒暑の氣候温和ゟて
地味い北より南より
西も東も一樣ゐ
五穀豊かゟ實よく
山ゟい金銀銅鉄の
種類分量最と多く
四面の海い行く處
深き利益の充物〳〵
採れども盡きぬ無盡藏
人い精神活潑ゟ
守る皇統聯綿と
周家八百何の其
二千五百の星霜ゐ
我が天皇い掛巻も
恵ぞふかき有磯海
濱の真砂い巖成〳〵

苔蒸をとい何日か有む　然いあきども天地の　伝らん限い皇統の
動く世ぞなし日本國

○扶桑歌

我天皇の治め知る
八百万代も動らぬぞ
治め玉へととことい丹
四方ゟ輝く御稜威い
斯る目出度我國ぞ
天皇が恵に酬へんと
盡せよや人力をも

○皇統の歌

1.
天ツ御神の授けに〳〵
本朝喇叭吹奏歌
わが日の本い万世も
神の御世より神乍ら
動かぬ御代ぞかたらぬぞ
月日の如く照す也
ヤヨ國民よ朝夕ゐ
心を合せひさふるに
合せて盡せ人々よ
豊葦原の瑞穂國

神武の天皇其昔　赫と怒し皇軍ゐ
太敷建てし宮柱　倭敢火の柏原」

2.
恵の露ハ御代々々に　蒼生ゐ降りのゝり
國の礎とことハゐ　大磐石の如くなり

3.
高麗も百濟も臣服し　富強の樣ぞ勇ましゝ」
光る明治の聖天子　いよゝ富強ぞ國の基

4.
兵士ハまを〳〵訓練し　商業をゝむ内と外
昔ゐまさる富強也　明治の民ハ自由也」
自由の民の真心ハ　國の御爲に捧ぐべし
皇國を守る干城ハ　吾等の外にあらぬべし
吾等の守る大皇國　行末等し天と地ゑ

生きて日本の米を食ひ　生きて日本の水を呑み　日本の土地ゑ住居をる

人ハ何をう勤むらん　亞細亞ハおろか五大洲　成ることならば月星の
餘所の世界ゐ至る迄　我日の本の光もて　耀のさんと此國と
愛をる心一筋ゑ　進ゑや進め文學ゑ　武藝ゑ勇氣奮ハして
磨けよをがけ日本魂　假の浮世と思ふなよ

○玉の緒の歌　井上哲次郎先生　譯

1.
眠る心ハ死ぬるなり　見ゆる形ハ朧なり
明日とも知らぬ吾が命　あれ果敢なき夢ぞのし
なゝ憐にいふハ惡し

2.
吾が命こそまことおき　吾が命こそたしかなれ
墓ハ終りの場所ならぬ　人ハ塵にて又散ると
いふハ肉体の上のあと

3.
人の願ひハ喜びか　人の願ひハ悲みの

人の願ひは是ならぞ
唯怠らぞ働きて

4.
今日より優る明日試待て
強き胸だも亦たえぞ
業は久しく時は馳す
一日々々と近くなる

5.
鼓の如く打ちつゞけ
此身を寄せて魁よ
死出の旅をば速すなる
言なき啞となる勿れ
爭む多き世の中よ

6.
ありてまを〳〵進むべし
如何よ空し紀過去なるも
牽るゝ牛となる勿れ
吾を忘れず神試知り
如何よ未来は樂しきも
吾とても人相同じ
共にこをば捨置さて
働くべ紀は今日斗り
勝ぎさる人世よ多し

8.
勉め勵めば斯ならん
長く殘さん此名をば
海より荒き世の中ゆ
獨り漂ふ吾友は

9.
吾名を聞きて進まなん
左をきば人は氣を張りて
如何なる運も事とせぞ
樂しみあるぞ働けよ

1.
ゆゑ怠らぞ務めなば
舩失ひて浪の間に
事業斗りふ心して
高に至れ馳せゆけよ

○ロング、フエロー氏人生の詩

外山正一先生譯

抑靈魂の眠るのは
人の一生夢なりと
死ぬといふべき者ぞかし
吾名をきゝて勇まなん
衰れを節で歌ふなよ

眠らゐや夢い見ぬ者ぞ
夢と思ふぞ左にあらぢ

2.
人の一生ゆめならず
人の終りい墓なくも
土より来り又土ゐ

3
ソリヤ靈魂の事ゐらぢ
此世ゐ在りて樂むも
世にある趣意ゑ有ざらん

4.
日毎々々ゐ怠たらぢ
功を立ねばゐらぬぞよ
光陰實ゑ箭の如く
心いゐかゑ猛くとも

此世の事い何事も
最と隘ゐる事ぞのー
墓に埋まるえのならぢ
歸るといふい肉体ぞ

又苦むも固と人の
生るい役ゑ立つ爲ぞ
今日いけふ丈一日の
藝道最とも易らぢ
墓ゐく進む葬禮の

5.
送葬太鼓打ツ胸い
最とも哀きに響くらむ
此世の中い戰爭ぞ
人ゐ生れた甲斐もゐく

6.
歩む羊や牛たるゐ
功名手柄ゐをべきぞ
如何ゑ樂く思ふとも

7.
如何ゑ嬉くありつるとも
働く可きい現在ぞ
胸の心い天の神
豪傑輩の一生を
生きて甲斐ふき者ゐらず

音どめされたる太鼓の音
其戰爭の中に居て
人ゑ使れ追れツ、
人ゐ劣らず憤發し
未来いあゑ丹す可らず
過去い昔ゑ過しこと
其働を見る者い
熟ら思ひ運せば
人ゑをぐれし手柄して

1. 稀なる譽得るならば
永く傳えて殘るらん
其薫しき名を聞ば
名はうんむしく後の世よ

8. 艱難辛苦の浪風よ
社會の海よ乘出して
助船さえあらぬ身を
吹廻されて破船して
功名遂ぐる者あらん
氣を取直し憤發し

9. さきば人々怠るな
暫時も猶豫をる勿れ
運命いのゐ拙きも
心を落をこと勿れ
撓まぢ止まず自若とし
功名手柄おしつゝも
勤め働く事をせよ

○苦樂の歌

天地の間は何者ぞ
耳目鼻口の五官能
運動知覺の二神經
備えし人を天帝が

2. 置き玉へける苦樂界
苦は實み樂の種ぞかし
古人は吾を欺かず
苦も晴れ易き玉の緒の

3. 樂が欲しくば如何程の
水一滴のたゝりが
續かん限り磨くべし
怒れる濤は天を蹴り

4. 汝が持ちし硯おる
積れば高き山岳の
末ぞ積りて大洋の
空よ聳えて巍然たる

5. 地を轟かを斗り也
麓の雲と蹈分けし
汝が目よ入る埃さえ
脚の下おり日も月も
小鳥は歌ふ其枝の
牛臥を影の凉さよ

6. 蔓り衍る櫛樹の
小さき手にも握られん
柱ゐ掛けし時辰器の
積もる分時を惜みてよ

7. 智の海徳の山を成せ
知識ゐ深く海よりも
高むる學びの苦みゐ
努々怠ること勿れ

8 牛の歩行の遲くとも
怠りなくむ捗取らん
天ゐ對しを不敬なり
全能全智の天帝ゐ

9. 結ぶ一ツの櫛子ゐ
戔々響く「セコンド」の
少しの事も目を注ぎ
山よりも亦其徳を
樂土ゐ進む道筋と
千里二千里三千里
自暴自棄をる其人ゐ
苦樂の界ゐ人を置ち

10 苦界ゐ沈む不善者も
已が隨意任しけり
樂土ゐ遊ぶ善人ゐ
加旃其人ゐ
名譽の花ぞ薫し紀

樂土ゐ遊ぶ善人も
邦の光を増す種子ぞ
現世樂しく後の世ゐ

愛國の名譽

國を愛をる其人ゐ　到底忠臣孝子なり
國の富強の元素なり　却説是よりゐ説出さん
名高き人の愛國の　心の花ゐ結ぶ實の

活潑々地の精神ゐ
西と東ゐ其昔
香りゐ朽ぞ千代八千代

○大楠公

金剛山ゐ今ゐあり　湊河原ゐ今ゐあり
然ゐあれども其山ゐ　崩るゝことも有ぬべし

正成公ゐ今ぞなし
昨日の淵ゐ今日の瀬と

湊の川は變るべし　かたらぬ者は人の名ぞ　建武の昔正成は
肌の守りを取出し　名も櫻井ののんむしき　教えを其子正行ゐ
かへす〳〵も傳へにき　これは一年王敵の　住める都を攻めし時
下し給ひし綸旨おり　是を汝丹與ふおり　余が免ゐ角ゐ成おらば
世は尊氏の世となりて　慮慮を惱まし奉らんは　鏡に掛けて見る如し
去は去り乍ら正行よ　父の子ならば流石よも　忠義の道は無て知る
弓張月の影暗く　家名を汚すこと勿き　打洩されし殘黨を
憐み扶助し隱家の　吉野の山の奥深く　月の桂はさゞなみや
流れも清き菊水の　旗を再び飜えし　敵を千里よ逐ひ退けて
慮慮を安じ奉れ　慮慮を安じ奉れよと　一言半句もわたくしの
事よ及むぞ公の　事をこま〳〵言ひ置て　手兵七百率ひツゝ
湊川よぞ馳せ向ふ　此時敵の陸軍は　五十萬とぞ聞えさる

其大將は直義と　いひと不直に非義の奴　兄尊氏は水軍の
頭となりて進み來る　和田の岬は義貞が　三萬余騎にて防ぎしも
敵は見る〳〵岬迄　乘り上げたれば我兵は　前後丹受けし敵と敵
弟正季迅く來れ　玆ぞ命の捨て處　目指す直義引捉へ
迷途の旅の供させん　進め〳〵と諸共よ　七度遭ふて又離れ
獅子奮迅ゐ狂ひしも　惡運強き直義を　取り逃したる其跡は
七十三騎のこる而已　身は十一の創口丹　唐紅の真心は
國の爲めおり正季よ　死しての後丹何か爲を　正季流石答へけり
吾は七度生らえり　賊の奴原取殺し　慮慮を安じ奉らむ
去おり〳〵と正成も　最と笑まし氣ゐ肌拔て　刺し違ひして朝露と
果敢おく消えし四十三　盛りの花ぞ散りまける　氣と勵まされ一族の
十六人と五十余の　從士の人數こと〳〵く　死出の旅路を供々よ

手ゑ手を採し大丈夫の　譽高きゑ比ぶきば　金剛山にたゝくとえ
湊の川に清くとも　など菊水ゑ及ぶべき　おど菊水ゑ及ぶべさ

本朝軍歌

○詠史

武士の　礎とし　稱へツヽ
其名ゝれせぬ楠の　大和心の曇りなく
君ゑつかへて國のため　赤坂山にたゑ籠り
あるに千早ゑ吹おろを　おろしの風ゑのたぎらば
たまりも敢えずちゑ〳〵と　散り行ゑけりかの本の
いやつさ〳〵に打寄て　又引かへし攻め来きば
今と限りと死おばやと　心きためて櫻井の
里ゑかゑれる言の葉を　子ゑおしへツヽ殘し置
其身にやがてつはものを　打ち從えて湊川

底拭深みて赤心ゑ
消えて戰の敗れると
倭　心に三吉野の
早くも仇の傳え聞き
驚かなんとむらきもの
盡を心にたゆみなく
梓の弓のなき數ゑ
吉野の山ゑゝゑれるも
親子むらかゝ殘ずも
赤さ心を今も世ゑ
おりゑける哉

○詠大楠公

むかりし事も泡となり
かねて斯ぞと空ゑミつ
花と散てし憐れさを
暫時まどろむ夢をさえ
心拭つぎて君がさめ
家ゑ傳へしみたらしの
いるてゑ事を記し置
實ゑ比ゑ死丈夫の
國を枕ゑなしてける
傳へ聞ざゑ身も寒く
あれまをらを

1.
さして行てふ笠置山
天皇を助くる大和魂
尋ね玉へと童子が
行宮蔽ふ雲深き
埋もれてあり木の南
言ひしゝ夢か幻か」

2.
木の南に楠と
招ぐ忠義に凝りし人
天誅時に乗じたる
奇しき御夢の教にて
此後賊の膽寒て
勲の程ぞ見えまける」

3.
一大寶に吼えし時
起る丈夫皆勇氣
敵と千里に逐ひ散し
虎を防げば狼の
響の聲に應じての
勇氣に國の寶の花ゝ
影も止めぬ跡もなし」

4.
忘きやこけん天皇の
恩を仇なる奴の首
威も尊氏の不忠武士
恵の露に淺ゝらじ
取りて拭ん國の錆」

5.
心に千々に身に一ツ
いとけなき子に語りツヽ
うんぬしき名の今昔
盡しかねたる其跡に
繼げよ〳〵と言の葉に
流す菊水名ぞ高し

○小楠公

花に櫻木さくらぬの
心ぞ跡ぬ河内なる
頑是なき他の童子と
身を粉になせし其人の
行末ゝたく鍛にたる
母ぬ語るも諸涙
夜に更けるたる延元の
敢えなや父の御首に

薫ほる教を守りツヽ
ふる里さして歸来る
異なる筈よ此人の
氣質を稟けし正行に
父がかたみの寶刀を
絶え入る涙母と子が
初の年の五月雨の
國を枕に眠りてし

共に死せんと思ひにし
人に纔ぬ十一の
父に皇國の御爲ぬ
父が傳えし誡ぬ
取出していおゝ〳〵に
國の御爲を話てし
乾く間もなき折柄に
生けるが如き有様を

見せんものとて送れし　御顔つく〳〵打守り　疊あらゝに入る跡を
賢き母い身を潛め　闕ひ寄れむ這い如何ふ　父がうたみの寶刀を
抜寸見せじと引抜て　グサと通さん有様ヨ　ヤヨ〳〵待て正行よ
御身が父母別れてし　時の誡何事ぞ　我が一族の其中ヨ
一人も殘りあるからば　金剛山のふる址　守りて身をも其骨も
國ヨ盡して惜むかと　聞分けて来し其舌の　乾きやせまじ今の今
此寶刀い腹されと　ヨモヤ言いまじ敵斬と　言て與へしものからん
是より後い父の仇　國の賊かり尊氏い　こゝを亡せ國のため
忠臣孝子の鑑かり　これを報ひよ父の爲　千部の供養ふ優るべし
肝膽ふ銘じて幼子い　是より後い足利を　追ふと言ひつゝ駈走り
首斬るまねふ尊氏の　首や得さりと悦びて　遊び戯ゝ人となり
後の天子の後村上　天歩艱難かりし時　引かへさじと梓弓

無て覺悟やゝたりけん　殘黨あつめ國の仇　報ひんものと二十二の
春と秋とい重ぬれど　望みある身の猛るとも　疾の床を徒ぬらを
恨かさなる血の涙　濺ぎし今の時も時　賊の攻め来し此時い
又と得難き時ヨして　臣が死をべき時なりと　真心盡を丈夫が
誠を愛でゝ天皇の　自愛々々と宣ひぬ　行宮辭しを正行い
前の天子の陵ヨ　ぬかづき詣で敵軍ヨ　切りて入りツゝ一心丹
進めやをゝめ天皇の　皇軍ふ敵をる奴原の　抜ける刃い鉛くらよ
忠義ヨ鍛えし金鉄い　などか通らん進めよと　勇氣金石とわせども
一木大厦の傾くを　支ゆる難くあれにも　衆寡敵せず四條なる
畏の露と其骸い　脆く消ゆるも其魂い　後の世々まで語りつぎ
言ひつぎ行かん丈夫が　國を枕ヨ眠る名を　國をまくらヨ眠る名を

○詠小楠公の詩

父がかたみの寶刀ハ
賢妃母がいさを言
忠義の鬼や湊川
堅く守ると呼びし人
飜がへしたる菊水ハ
梓の弓の一張ハ
虎ハとゞむる美かる皮

○兒島高德

元弘二年きさらぎの　小雨ふく〳〵笠置山
さして行手も楠の　蔭ざゝふ見えぬとこ闇ゑ　あやめも分ぬ夜の風ゑ
心ハ鬼の蛇のごとき　妖怪變化の賊共ハ　荒きわたりたる人面の
龍駕を西の隱岐の海　海路遥ゑ移しけり　恐多くも天皇の
其有様ハ今も尚　敵斬り盡す爲ゑりと
よくも悟ゑし幼子ハ
七度生きて國の基
乘ゑ移れるゑ此人ハ
實ゑこそ國の寶ゑり
實ゑ赤心のゑるしゑり
殘るハ人の名譽ゑり

史上ゑ見だゑ身の毛立　腸さえも寸々ゑ　絶入る斗りうるむ目ゑ
古ゑゑ外ぞなし　其時兒島高德ハ　衆を集めて言ひる樣
仁を爲をため身を殺し　義を見て爲をハ勇ゑと　勵まゑ言葉勵む武士
共々向ふ舟坂の　山の嶮岨ハこきやこれ　天の與ひし要害と
身を潛めつゝ堅壘のみ　我天皇拔奪ゑんと　まつゑ甲斐なや鳳輦ハ
早や山陰ゑ向ひぬと　聞くより早く舟坂の　樹の根岩の根蹈碎き
望めゞ又も鳳輦ハ　遥に過ぎて後影　纔ゑ拜む斗りなり
今ゑ挫けし兵士の　跡見送りて高德ハ　天を睨みゑ地ゑ哭し
姿とかへて身をやつし　風の晨も雨の夜も　厭むぞ御跡慕えつゝ
善き折あらゞ赤心を　我天皇ゑきおえあげ　肅慮を安じ奉らんと
氣の張り弓ハ撓まぬも　守り嚴しき板庇　隙さえ洩らぬ龍姿ゑ
さし足拔さし日本刀　櫻の老木かき削り　墨斗の墨の黑々と

赤きこゝろを書下を　十字の文字は長城の
ゑるしも賊は明めくら　むらがり視るも明鴉
我天皇は龍顔も　最と麗しく暫の間
斯の如くゝ高徳が　虎の穴ざ丹恐なく
勲は後の世々までも　煙きわさり曇りなき
ふるさをたづね新しく　護りの神とぞ崇らる
彼れも人ゝり吾も人　食ふは今もいみしへも
飲むは昔も今日も　清き日本の國の水
國を枕に誠忠の　樂き夢や結ぶべし

堅き固めや勤王の
阿房々々と笑ふのみ
愁の御眉開きけり
虎の子得んと思ひて〜
明治の御代ゝ愛國の
讀む人々よ心せよ
日本ゝ實る瑞穂ゝる
鄙屈の腸洗ひ去り

○詠兒島三郎の詩

1. 身ゝふりかゝる春雨は　晴ゝても胸はれやらぬ
心ありげな櫻木は　花も涙をおさめうぬ

2. 思案ゝ碎く身も骨も　君を思ひば死ぬるとも」
笠脱き捨てゝ抜足丹　櫻の蔭ゝ身を潛め
音や立てじとやう〳〵ゝ　削りし幹の跡きよめ
書くほる墨は薄くとも　濃き赤心は花よりも」
3 書紀了りても今更ゝ　胸に張り来る弓あらば
東の奴原一射ゝ　ヤワカ去るべき今此場
殘り多くも明近く　思焦して潛ゝ行」
4. 鴉は起す明めくら　阿房が讀めぬ一聯は
隱岐の海邊の朝櫻　最と笑ましげ丹大君は
5. 見そなはしゝ々ん筆の跡　殘ゝ〜文字は皆誠」
天勾踐を助けてよ　范蠡時ゝ努力せむ
花も西施丹身を奇よ　微忠は何日ゝあらはれむ

美名は朽ちじ今昔　花は櫻木人は武士

○藺相如

名稱さえも戰國と　いむし昔を見かへれば　いとゞ亂るゝ漢土の
周の季年の就中　秦は國富み兵強し　趙も強しといひ乍ら
爭ひがさき風情あり　趙主惠文ある時よ　卞和の璧てふ名玉を
最とも大切ふおさめ置　天下無比ふる寶ぞと　愛翫ふゝめならざりし
去は去り乍ら此國よ　まさる寶ぞあらはきし　其は何ものぞ秦の王
望をもふゝく卞和氏の　其名玉を與へなば　これふ酬ゆる十五城
直ぐ參せんいうよやと　促うを使者は櫛の齒を　引くぞ如くふ迫り來る
いかゞいせんと趙の臣　額を蹙め眉を寄せ　與へざらんか彼強し
怨の程ぞ恐るべし　こゝを與へば麁暴ふも　欺き取りて其城は
渡やせまゞいの身せん　如何よ〳〵といふ折ふ　進ゝ出たる趙國の

此上なき寶藺相如　言葉をるどく說出ぬ　これを與へよ與へぞば
其曲たるや我ふ在り　璧を與へて城ふくば　其曲たるや秦よ在り
直さい天の道と聞く　相如不肖の身ふれども　御使者の役ぞ引受けん
璧と渡をもわたさぬも　あれを償ふ其城の　有と無きとふ決すべし
相如は直ぐよ旅粧　いそ〳〵としを秦よ入　璧を渡せば秦王は
國の強きを鼻よ掛け　贈る氣ぞなし十五城　愛國深き藺相如
おどて黙して止べきの　璧よ微疵あり吾ぞ知る　教え示さん見せようし
言ひツゝ取て手早くも　從者よわたし趙國よ　落し遺りよし智惠深妃
相如はツたと秦王を　睨をつけたる皆ふ　朱拭濺ぎツゝ振亂し
怒れる髮は逆立ちて　かむれる冠衝計り　いきま妃あらく言出ぬ
秦若し城を酬へぞば　臣が頭は碎くとも　趙の名玉完ふし
一歩さりとも我國威　跡へ退せじこれ見よと　勇氣面よ溢にし

此愛國の一言ゐ
畏れを抱き肅として
強國握る秦王い
此人ゐと思ひてや
上大夫ゑふ官爵の
兩主澠池に會せし日
樂器からして趙の歌
苦さ胸ゐ細り行
聽者いとゞ趙王が
日頃の勇氣奮ひツヽ
音ゑ聞えし秦の歌
請へども王い威猛だの
流石ゑ強き秦廷の
息をころせし有樣い
流石ゑ眼あゑ胸の中
畏き敬ひ歸せしを
高紀名譽を仰ぎけゑ
秦王強ひて趙王ゑ
うさひ玉へと促をを
秋の末野の虫の音の
心の底を汲み分けー
ヤヨ秦王よ秦王よ
缶を擊ちて趙人の
おのが富強を鼻先ゑ
王も諸臣ゑ一同ゐ
聞さえいとゞ心地よし
噫趙の寶い璧ならで
趙の國人喜びて
時稍過ぎて秦趙の
二十五絃の瑟といふ
辭み無たる趙王い
聲もあれに歌ひ止む
聲もあらヽゑ藺相如
相如が望み叫へてよ
耳悅むせ玉ひねと
掛けて拒める挨拶ゐ

憎き秦王許さじと
同じ一國今日の
人ゑ望みてたのしむい
臣が頸の血大王に
秦の威勢拉ぎ
惠の雨の心地して
比へて愧る愛國の
光い天下後世ゐ
劍を撫でヽ仁王立
好を結ぶ其會ゑ
理か非か悲カ理かナ、何と
濺ぐい易ー五歩の内
缶の音ゑ酌む酒い
趙氏が持てる連城の
相如が飾る上卿の
燿くことゞ心地よし
秦も一國趙も亦
おのが好まぬ其ゑわざ
危うき場所も事とせゞ
歌へ玉ひの聲の下
趙全國ゑふりかヽる
寶の玉の光さえ
美ゐる衣冠ゐ趙國の
燿くことゞ心地よー

○詠藺相如の詩

1. 廣き楚國ゐ寶なし
　朽ちぬ金言後の世ゑ
　學びの花ゞ咲ゐけり
　寶い賢き人ゞかし
　教えの種子ゞ蒔ゐけり

2.
趙氏の璧ハ連城の
疵おき璧に疵ありと
言ひし氣象ゐ最と高し

3.
玉を抱きし人も玉
玉碎けおゞ價なし
人や仰がん後の世も

4.
鳴せし瑟のわゞ響
酒の莚も修羅の道
忠義ヨ碎く人の道

5.
古人ハ予を欺らゞ
爪牙鋭ぎ秦の國
恐らす人の姓ハ闌

價ありとも何のその
言むし言葉ゐ薫むしゝ
秦を靡けし猛き様
仮令頭ハ碎くとも
擊せし彼きが持ツ缶
此丈夫が胸のうち
寶ハ賢き人ぞかし
趙の威光や恐るらん

○蘇武

風蕭々と易水の
其日を期して歸さんと
想ひ出をさえ憐おり
中郎將たる彼蘇武ハ
匈奴の國ヨ使せり
氣ゐ見蕩てゝ不敬ゐも
榮華ハ人の樂ぞ
榮華々々の猫撫ゐ
人の臣たる者の道
あえおや蘇武を引捉え
咽濕さん水もなく

壯士の歌も想遣る
虎狼の秦ゐ燕丹が
漢の孝武の天漢の
なれー故國を跡ゐ見て
匈奴の禪于ハ其人の
甘き言葉に招き寄
我ゐ從ひ其榮華
蘇武ハ怒を含みさる
いと細のゐ説けきゞ
閉ぢ込めゐけり土の牢
食物とてハ一粒も

角おき馬ゐ角生えー
人質たりし其昔
初の年ゐ命を受け
關路遥ヨ勇々敷も
活潑悲憤ゐゝためたる
人生ヨづゝ五十年
盡し度まゝまとめてよ
顔ゐ似氣なく譏り
無法の奴原無殘にも
只さえ寒き冬の夜ヨ
與へられざる苦さも

忍びて國のためゝ泣　涙の雨ゐ雪とふり
走おそ天の　賜と　摘み毀りて玉の緒の
匈奴の奴等呆れ果　蘇武ゐ神ふり人ならぎ
無人の境ゝ彼を置　羊を飼ゐせ男羊の
其日を待ちて本國に　歸やるべしとゐうせよと
浮き年月ぞ送りける　其友李陵ゑ衛律も
不義の富貴ふ糞虫の　吾身知らぎゝ忠節の
降れと勸む甘言ゐ　如何ゐ其耳穢をとも
心を神のあれむこの　孝昭帝ゐ使者を遣り
蘇武ゐ死ゑさり〳〵と　いふも愚よ上林ゝ
狙違むぎ落る厂　足ゝ結びし玉章ゝ
寒き海邊ゝ男羊の　乳汁まちつゝ十九年
牢の窗ふふり積る
續く日數ゐ愚なる
尚此上ゐ北海の
乳ふきものふ乳汁出し
又もや蘇武ゐ大澤ふ
共ゝ匈奴ゝ從ひて
愛國ふのき蘇武に迄
氣ゐ張り弓の張り詰し
詰きゞ匈奴いつたりを
獵せし天子射る弓の
尋る人ゐ大澤の
永の年月重ぬれど

一日一夜も起臥ゐ　漢の節をゞ離さゞと　朝の露の果敢なくも
昔故國を出てし日ゐ　鴉の濡羽欺きし　鬢すら亂れ今ゐむや
雪を戴く老の身ふ　故國戀しとのこちたる　便を得たり如何ゝぞと
問ひ詰られて流石ゝも　返す言葉のふりけん　震む慄き蘇武を呼び
いたむる言葉忠節の　蘇武を神とぞ思へける　頭の雪ゐ白くとも
心ゐ赤き蜀紅の　錦を飾る漢の世ゐ　孝武ゝ出でゝ孝昭の
むや三代とりむりたる　間の苦節よく忍び　故國ゑをれぬ丈夫の
美名ゐ千代も萬代も　朽ちる日ぞなし諸人よ　蘇武ゐ神ふり人ならぎ

○詠蘇武の詩

受くるも重き　詔　捧げて出る丈夫ゐ
のぼる山路や渡る川　匈奴の境千万里

越えて伸せし其權理
蘇武が飼ふてふ男羊ハ
今ふる里ヨ着る錦
海士ゞ板屋ヲふりし雪
かしま敷名もうんばしき

○「ペロピダス」及ビ「エパミノンダス」

歐羅巴洲の古國ゐる
希臘國ハ文學の
鳳ヲ開けし國ヨして
縮むる望み水の泡
數個ノ聯邦並び立つ
中ヨ勢力強かりし
「ぜーぶ」の城の「カドミー」を
子や生ヨけん神の鴈
「スパルタ」人ハ無法ゐも
奪ひ取りてゞ固めける
返さみやよーと「ゼーブ」人
十九年間着し襤褸
血氣ヨたゞる少年の
「ペロピダース」ハ勇と敢ー
同氣求むる少年の
心拉碎く玉あられ
十一人をかたらへて
此樣ーく呉ん其樣して
思ひ運らし丈高き
人相同ゞ彼れと吾
躰身も卑く肥りたる
腰も細らし華美姿
婦人の服ゐ飾り立て

途の歩行もいそ〳〵と
通せし人ハおれぞこれ
「カドミー」城ゐ着しける
番兵それと氣も附かぎ
拔けゞ玉散る劍光ハ
表ハ優美ーき婦人連
裏ゐハ金の胸板や
かくし帶びたる夫丈を
國の精神鍛えたる
夏猶寒き氷の刃
「アルチアス」てふ其人ハ
そをとも知ぬ「スパルタ」の
榮華ゐ奢る大將の
飲よ歌へとザンザめく
海と山との珍味もて
席も狹しと打並べ
羽織りー女の服脫げゞ
時分ハよしと愛國ヨ
凝りのたまりー十二人
柳と見ーハ薛目ヨて
卑しと見たる其丈ハ
雲突く斗り其腰ハ
見えーハいうに鬼薊
臣より大に其顏ハ
雨を含める海棠と
辟易ーたる「スパルタ」の
血走る眼逆立ちし
髮ヨ勇氣も顯れて
元の如くに「ゼーブ」人
腰拔武士を足ヨ掛け
手ヨ掛け屠り「カドミー」ハ
他の人々ハ腕を扼み
守れる城こそ堅固なり
是を聞より「スパルタ」の
齒を齧ミからし軍勢を
募る折ーえ他の國ハ

「ゼーブ」の富強を嫉みてや
勢強く攻め来たる
「ユパミノンダス」てふ人が
寄せ来る敵の奴原を
前ゐ顯えき後より
野邊を染たる血の跡ハ
葛藤ハ解ぬ苧手巻の
「ゼーブ」の國の守り神
妬む「ゼーブ」の無目鳥
此恩澤を謝すべきゐ
街衢の塵の掃除番
埋め織しハせしものゝ

無名の師ゑ荷擔なし
又もや「ゼーブ」ハ愛國の
六千人を引卷連れて
とゝも爲さで馳せ向ひ
切りて薙立縱横ゑ
「ゼーブ」の花と知たり
糸の如くゑ年や經し
斯程ゑ深き恩人の
最高無二の冠を
多數を占めし馬鹿者が
無理ゑ言附け朝夕ゑ
玉の光の曇りなく

二万五千の兵を以て
心も深き剛勇の
大河の決せゝ勢ゑ
東ゐ隱くき西ゐ出
蹈み荒しゐる「ビーゾトラ」
是より結ぶ兩國の
「ユパミノンダス」の手柄こそ
高き名譽や善き生活
月の桂ゑ匂ハして
情用捨も荒したる
賤しき業に此人を
やがて無目の奴原ハ

此人なくむ此國ハ
後悔臍を噬み乍ら
劍を捧げ請ひツゝモ
實ゐ無目の奴原が
尚余りある事なるも
最と嬉しげに劍帶び
神や助けん我直を
「ゼーブ」の國ゐ「スパルタ」の
一歩縮めむ一歩丈
露塵程も氣ゐ止めず
手廣き野邊の真中ゑ
投矢ハ雨の降る如く

敗れて己が身の上も
畏る〳〵も頭下げ
推して以前ゑ彌益せし
恩を忘きて仇ゐせゝ
「ユパミノンダス」てふ人ハ
國の敵ゑ「スパルタ」ハ
進めよすゝめ諸共ゑ
無禮の奴の足跡ハ
國の辱なき諸人と
國の爲めゑと身も勇み
揉みゑ揉みツゝ押出し
宛然蟲蝕の飛ぶ如し

覺束なゝと心づき
塵に塗れし箒捨て
大將軍と崇めけゝ
憎き振舞憎きても
是を憎まぬのみゐらむ
曲れる本ハ彼れにあり
死をる枕ハ「ゼーブ」ゑ
一歩たゑとも着さをる
私事の其仇ハ
勇勵まし「マンチニア」
兩軍亂れ入り雜り
噫天道ゐ是非なき乎

智勇の上に具へさる　仁者の壽永うちぞ
「ユバミノンダス」氏の胸ゐ　グサと通りて真逆
見よや〳〵と夕月の　のげなる駒の蹄並を
目指せし敵の大將の　首討取りて功名し
薫ばしき名と揚おんと　勇み立しも「ゼーブ」方
スハ大將を打をおよ　死おび諸共死ぬるべし
救ひ參せ「スパルタ」の　卑怯未練の奴原を
御心慰め奉らんと　凝りうたまりし一心ゐ
陣所ふこそい入まけり　軍醫い直ま傷口を
致命の傷の最と深く　投矢を抜けば玉の緒の
是非もなく〳〵大將を　臥床の上ま置く身より
烈しき氣參の大將い　苦痛をさらゐ事とせで

飛び来る投矢不幸にも
「スパルタ」人い諸共ま
揃えてドツト突出し
月の桂の冠ま
一層勇氣勵まして
恩あり義ある大將を
國の境ま逐ひ返へし
安々救ひ參らせて
改め診れど這いいうま
切れて返らぬ事ときく
置るゝ身ふい疾病の
勝利いいかに敵味方

いづれまあるえ氣遣し　未ダ戰場の吉左右を
来ぬう〳〵と言續け　身の苦みや私の　知する使者い見ざるか
口い尚更色まさえ　出さぞ待ちし其使者い　事い一言半言も
喜び玉へ大將よ　十分の勝利我まあり　息喘として入り来り
目を見開きし大將い　去らば此世ふ用おしと　勝てり〳〵といふ聲ふ
國を枕ま瞻りしい　最と勇ましき事ぞかし　投矢抜き出し「ゼーブ」なる
十九世紀の西洋い　口ゐ文明唱ふまど　讀む人々よ心せよ
我天皇國ま生れさる　人の枕い日本おり　呑噬主義い平常ぞ
人の枕い日本なり

○「ペロピダス」を詠ぞるの詩

肉の林ゐ酒の池　歌ツ舞ひツ酣の
中ま華美おる手弱女の　まばゆき衣むとりかけ
待ツ間程おく夜も更け　有頂天なる生醉の

腰や拔けん丈夫の
「カドミー」城の夜半の月
見よ「スパルタ」の弱妃敵
殘りし跡ハ最と憎き

○「エパミノンダス」を詠ぜるの詩

公私の德を無しもの
「アンチニヤ」なる野邊の鬼
赤き血潮や胸先の
睨むや君が隣國
何處の月も月ハ月
埋もるゝ身ハ民の垣
投矢と挿む國の幹
十二の軀幹高き丈
さえわたりける「ゼーブ」人
こけツ顛ツ遁ぬらん
人の血潮や花と見ん

○「エパミノンダス」を詠ぜるの詩

幾何あるか今の世ゑ
「ゼーブ」を守る赤心の
投矢の恨後の世ヨ
折てぞ弱ー國の角
何處の土ゑ土ハ土
義に捨る身ハ人の道
拔くゞ悲しき今日の勝

○米國獨立の原因

讀む人知るか白波の　果さえ知れぬ古の　知識ヨ富ー閣龍子
見出せし西の新世界　廣亞米利加いつしかヨ　「フロリダ」洲の濱邊より
「ニー、ブリンスウィック」なる　間ヨ廣妃英領の　土地に住む人日ヨ多く
增す數の子や喜昆布　海と山との產物の　慾ヨ目のあき英國の
王も王なり臣も臣　天幸厚き殖民の　力を奮ひ稼ぎてー
深さ利益の分前と　貪らんとて印紙稅　薄妃厚きの區別あく
絞る血汁ヨ誠忠の　義士の腸斷ツ斗り　忽ち怒る「パトリック、
ヘンリー」茲ヨ憤激ー　天ヨ訴ひ地ゐ哭し　言ゐし言葉今も尚
聞けむ膚ヨ粟ぞさつ　聞けよ聞けノ〳〵皆人よ　千七百ハ六十を
五年越ーたる其時に　布告のあるや此人ハ　心ヨ立ちー好論理
天下い天下の天下ゐり　「ジョージ」三世戮すべし　民政今ゞ復をべし

不正の税を出す勿れ　好める紙を用ゆべし　吾等承諾せぬ内ゴ
無理ゴ吾等の財産と　貪り取るい不正なり　譬がたなき暴虐ぞ
譬ひがたなき壓制ぞ　言間もあらず茶の税い　彌ゞ上ゴも重くして
亞米利加國の貴婦人も　只一會の茶會すら　出来ぬ悲さいぢらしさ
元を糺せば英國の　施政の惡しき故ぞと　女心も張り詰めし
弓張月の影くらく　思ひ亂れて年ぶ經し　一千七百七十年
爭ひ起る「ボストン」の　町ゐ住みゐし人民の　三人を殺し其上に
五人傷け亂暴の　振舞憎し英國の　赤上衣の奴原い
おのが政治の腐りしを　知らで威張れる蛆虫の　憎ーと思ふ米人の
心い一ツ金鉄ゴ　こり固まりし時も時　浮うと乘りこむ三艘い
茶を積米「ボストン」の　港に錨下せしを　見るも忌むし米人い
燒腹まざき銘々ゴ　土蠻姿ゴ打扮て　茶々無茶苦茶ゐ

這り込む濃茶　薄茶の區別なく　厚ち忠義も國のため
死をもて誓ふ有様を　聞く英國の暴君も　汚吏も議院も持餘し
力にうけて倒さんと　送る兵士の數々い　山なき屍川なす血
自由の花を染出す　七年間の戰爭の　地固なせる亞米利加の
降ゞ降々吹うゞ吹け　吹く其嵐降る雨い　いつの止めども我國の
光埋めし朽せじと　矢竹心の米人が　精神一到何事う
成ざる事のあるべきか　一騎當千々万の　不義の兵士ぶ安々と
打敗りてぞ和睦なし　共和政治ゐ治め行く　天下い天下の其天下
今ぞ榮えし米國い　其旗影を世界中　到る處ゐ閃めかー
同盟國と睦まーく　榮え行くこそ愛國の　心の花ゴ結ぶ實と
肝ゐ銘ぢて讀む人よ　倩思ひ今日の　我日本い北海の
一葦海水程近く　鷲の旗影魯西亞の鰐　イザ事あれと睨み詰め

我日本の生血とび　吸り度き顔見ゆるなり　人氣眠れる支那の豚
折々寢惚無禮おす　事も間々あり國人よ　無益の事ゑ隙潰し
無要の業ゑ力入れ　怠る時ゑあらぬなり　造次顛沛愛國の
氣力を練りて日本の　干とおり又城となれ　然ゑ間々見る無氣力の
親ゐ涙ゑ子も涙　貴き兵士となることを　嫌ひ果しい柿色の
禁錮衣ゑ身を汚し　イヤ〳〵作ら頸ゑ繩　引き出さるゝ心地ゑて
屠所の羊の馬鹿者と　人ゑ笑ひ誹らるゝ　奴ゐ愛國てふ事狂
知らぬ爲おり讀む人よ　返す〳〵も心して　皇國の干や城とおり
治平ゑ亂を忘るゝおゑ　鰐鯛るゝおら鰐を斬れ　鷲鯛るゝなら鷲狂され
五尺の體碎くとも　日本國を愛をべし　氣象ゐ高き富士の嶺ゑ
卑しとおせよ赤心ゐ　琵琶の湖清くとも　いやが上ゑも清くして
朝日燿く日本の　光ゑ照らせ月星の　世界の果の果迄も

世界の果の果迄も　米國人の骸鑑ゑ　心の化粧怠るな
朝日ゑ匂ふ山櫻　匂ゐをる人吾等なり　匂ゐをる人吾等なり

○米國獨立を詠ぜる詩

1.
噫英王を打崩せ　神ゑ吾神々の風
噫民政を復してよ　友よ吾友友人よ
噫吾躰何のため　噫吾心何のさめ」

2.
眠むる枕ぞ此國ゐ　重おる仇ぞ英國ゐ
神やまことを守る也　人や自由を好む也
進んで自由の鬼とおれ　奴隷の淵ゑ入る勿れ

3.
玉と碎けてうらむるな　全き尾をうらやむな
寒苦の後ゑ梅清し　大雨の跡や土堅し

勵ます「ヘンリー」とげむ人　後の世堅し國の基

新体詩格 受國美談 畢

明治十九年三月六日新體詩學必携版權免許

著者　茨城縣平民　中川清次郎
　　新治郡戸崎村四十六番地同居

出版人　仝　内田鶴吉
　　新治郡土浦田宿町四番地同居

明治十九年五月廿日新體詩格愛國美談版權免許

纂述者　茨城縣平民　山口常太郎
　　新治郡土浦鷹匠町三十一番地寄留

出版人　仝　内田鶴吉
　　新治郡土浦田宿町四番地同居

明治十九年六月十四日合本御届

正價金參拾錢

茨城縣平民
出版人　内田鶴吉
新治郡土浦田宿町四番地

茨城縣常陸國土浦鷹匠町壯一番地
發行所　新体詩學研究會

日本橋區通四丁目廿五番地
發賣所　春陽書屋

常陸國土浦田宿町
同　柳澤柳旦堂

茨城縣水戸上市泉町一丁目
同　柳澤柳旦堂

水戸上市鉄砲町
同　柳旦堂分店

新体詩學研究會設立主意

詩は文學の一科なれど　自身らなる價格持ち　東西國を異にして
風俗言語變れども　往昔よりして學びきて　氣高き地位を占たるは
歴史ぉ照し著るし　去は去りながら今茲で　東西詩學の精神を
比較べて見れば其違ひ　驚くべきは何故ぞ　多分各自の學風の
及ぼしたるの結果らぉ　一は三千年来　唯最と狹き其場所に
腦の働を縛られて　他は理學上進歩ぉぞ　伴はきつゝ考へも
日々に進める人々の　心に映る想像も　好きや嫌ひの念慮まで
互の間に隔つて　腦に發する詞藻なれば　同く咲くの理や有らん
去れど是等は支那國の　學風咎む計りぉて　詩學ぉ遺恨ぉけれども
最早今では何様しても　元の地位には居れぬぞ　先聞き玉へ詩と云へる
其性質は如何様ら　支那親爺は志を言ふと　赤毫生やす「テーチア」は

想像演ぶと言ふらい　何の道口で轉りて　樂器に合をものならん
去に奈何や支那の詩の　我等に於ける其樣い　思と焦して字ゑ並べ
形を仕組む計りまて　他ゐ樂のゐき上ま　骨折り損の草臥れて
月落烏啼と轉すれば　聞く人々い馬耳ゐ風　又月落ちと讀み立てば
人まい夫れて解きども　悲ゑや詩てふ形なし　如何ゐれば支那の詩の
原理を茲ゐ尋ぬれば　最と嚴格な法ありて　絶句で謂へば二四不同
二六對抔稱へつゝ　平上去入の四聲ゐそ　詩學の上の基礎まして
夫で樂譜ゐ合ふものぞ　然るま月を月と讀み　何ぞ入聲ま響くらん
韻字と云へど猶去なり　霜天ゐ滿ち愁眠ま　對をと讀めば其韻い
天眠船と皆んの　響きを持つも何かせん　千里鶯啼き緑紅ま
映をの韻ゐ引替へて　水村山郭酒旗の風　南朝四百八十寺
多少の樓臺烟雨中　紅い音讀風い訓　訓ま讀みたる中の字い

紅の音ゐる響まも　訓の風なる響ゐも　變るとをれば其韻い
偖て何處ゐぞ在ならん　韻字と云ふい發音の　似よれる者と句の末に
置くてふとい東西　別ゐ變りゑこともゐゑ　目を樂まを詩であれば
支那の詩學も我々が　學びて實ま善けれども　樂器ま合せ耳で聞ゑ
樂むものと知るらい　最早是後いサツパリと　三行半の離緑狀
其代りまい花嫁ゐ　娶るい大學教授ゐる　外山矢田部の先生が
考案されし新体詩　名こそ變れど其實い　戯曲小説歌ゐとで
毎度諸君ゐ出會らん　左きど七五此の詩体　未だ日の淺く十分ゐ
發達せしゐあらざきば　我々共い相謀り　一の會社ゑ打立て、
詩學の區域擴張ゑ　彼の西洋の詩學(ポエトリー)をば　基となして各々の
意見を淘げ十分ま　我皇國の詩の學の　光り輝く成果ゑば
收めんことを祈るのも　唯我國の爲ゐりと　互に心紅葉々の

燃る思の人々い　共ゑ来りて合体ゑ　其方法ふ盡力せ

新体詩學研究會々則

第一條　本會ノ目的ハ詩學改良ヲ專務トシ從テ音樂上ニ及ホス者トス

第二條　本會ヲ新体詩學研究會ト稱シ事務所ヲ左ノ所ニ置キ追テ各地ニ支會ヲ設クヘシ

第三條　本會ト目的ヲ同シクスルモノハ會員タルヲ得ヘシ
但會員ヲ分チテ名譽會員通常會員ノ二トス

第四條　名譽會員ハ我文學上ニ有益ヲ與フルト認メタル人ニ向テ我會ヨリ請フモノトス

第五條　通常會員タラント欲スルモノハ宿所姓名ヲ詳記シ捺印之上入會ノ証トシテ金拾錢ヲ添テ本會ヘ申込ヘシ

第六條　本會ハ詩學研究思想交換ノ媒介トシテ毎月一回新体詩學研究會叢誌ヲ發行シ會員ニ領布シ余部ハ定價ヲ以テ公賣ス
但シ發兌之度數ハ時ニ隨ヘ增加スヘシ

第七條　叢誌ハ欄ヲ分テ論說詩雜錄廣告ノ四トス
論說欄ハ我文學上ニ關スル意見
詩欄ハ新体詩ニ限ル
雜錄ハ古今ヲ問ハス我文學上ニ關スル談話或ハ詩人傳
廣告ハ通例

第八條　會員ハ叢誌材料トシテ我文學上ノ意見及ヒ詩稿ヲ本會ニ送ルヘシ

第九條　通常會員ハ會費トシテ毎月金拾錢ヲ本會ヘ納ルヘシ
但郵便切手ハ一割增

第十條　名譽會員ハ叢誌ハ勿論本會ニテ時々出版書籍ハ無料ニテ呈スヘシ

第十一條　本會出版書籍ハ會員ニ限リ半價ニテ賣渡ス

第十二條　會員ヨリ叢誌廣告文ノ依頼アルトキハ半價ヲ申受クヘシ

第十三條　其地方ニ於テ會員十名以上誘導セシモノハ支會長トシテ署名

シ且ツ無料ニテ叢誌ヲ呈スヘシ
但シ支會長ハ支會内ノ會費ヲ取纒メ本會ヘ送致シ且ツ叢誌ヲ配達スル任アリ

第十四條　會員中轉居又ハ改名スルトキハ其都度速ニ本會ニ通報ス可シ
否ラサレハ叢誌不着ノ責ニ任セス

第十五條　會員姓名ハ叢誌上順次記載ス

第十六條　會員中退會セント欲スル者ハ其事由ヲ本會ヘ通スヘシ其既ニ納メタル金圓ハ殘余アルモ返還セス必ス本會發行ノ叢誌ヲ以テ滿ツルモノトス

第十七條　會員中一ヶ月以上會費ヲ怠リタルモノハ無斷除名右其事由ヲ叢誌ヲ以テ廣告スヘシ

第十八條　本會ハ叢誌發行ノ爲メ持主編輯人印刷人ヲ置キ且幹事ヲ置キ一切ノ事務ヲ總理セシムヘシ
但叢誌ハ會員二百名ニ滿ツルヲ待ツテ發行ス

事務所　茨城縣常陸國新治郡土浦鷹匠町壯一番地
新體詩學研究會本部